

## 落伍の烙印からの再生を求めて

—「涙眼模糊中的信念」と「我在霞村的時候」をめぐって—

江 上 幸 子

一九八六年末に、丁玲の南京時代（一九三三年五月国民党に逮捕され、約三年半の軟禁生活を強いられた）についての回想が発表された。この回想に付けられた資料により、一九八四年八月の正式な丁玲名誉回復通知において、丁玲の転向の噂は証拠がないという一九四〇年の審査結論を、中国共産党が再確認したことが明らかになった。<sup>(1)</sup> 軟禁中の「転向」は一九五七年の丁玲批判の主な理由の一つだったが、その際にも転向声明や裏切り行為という証拠が挙げられたわけではない。批判側が根拠としたのは党を裏切った夫・馮達との同居であり、結核を病んだ馮達への手厚い看護であった。<sup>(2)</sup> 数年前には、丁玲が自己の転向を否定し、軟禁中の女兒出産が研究者により確認されている。<sup>(3)</sup> これらのことから、問題は丁玲自身の転向にあるのでなく、裏切り者と同居を続け子供まで設けたことにあるのだろうと推測はされていた。この点について丁玲は今回の回想で、馮達は不注意から党員を売る結果になつたが、その後は裏切り行為を犯さなかつた筈であること、馮達との別居を何度も国民党側に要求したが通らなかつたこと、馮達が不注意を強く悔やみ丁玲の脱出に協力しようしてくれたこと、国民党側を欺く上でも彼の存在が必要だつたこと、国民党の特務に監視され仲間から隔離

された中で、やはり最も頼りとなるのは彼だったこと等を述べている。そして出産にまつわる気持を記した次の二段は、この回想の最も印象的な部分である。

馮達はかつて私の夫であった。しかしこの数か月来、私は彼をかたきのように見なしてきた。今この薄暗い深山に隔離されて、（略）私は本当に暖かさが欲しかった、たとえほんのわずかであっても。（略）この時の私には愛も喜びも全くありはしなかった。身も心もすっかり凍えつきそうで、もし人の世にわずかでもまだ暖かさが残っているものなら、それで自分を暖めたかった。私は共産党员だが、やはり一人の人間でもあった。人間が自然に持つている生の欲求を、私はわずかながらまだ残していた。小さな宇宙の中で、全く生氣のない氷のように冷たい宇宙の中で、私の麻痺し凍えた心は馮達に対する恨みを和らげずにはいられなかつた。この山の中で彼のほかに誰がいよう。しかもこの時の彼はひたすら、自分のしたことへの悔恨と、私への憐憫と同情を表わしていたのだった。私は自分の心が確かに強さが足りなかつたことを責めるほかない。かつては夫だったが今は恨み骨髄に徹すべき人が差し伸べて来た手を、こともあろうに容認してしまつたことを責めるほかない。この一時の軟弱さと麻痺した心のために、当時もそしてその後も長い間にわたつて、ある人々の指弾と侮蔑を受けることにならうとは誰が知りえただろう。このとき私はとうとう妊娠してしまつたのだ。私にはおなかの子を殺してしまつた権利はなかつた。まして生れてきた女の子を馮達の手元に残してきたり、あるいは誰かにやつてしまつたり、孤児院や育嬰堂に入れてしまつたりはしたくなかった。この小さな命を救わなければならない。どんなことをしてもこの娘に、全ての子供と同様にちゃんととした暮らしをさせ、美しく明るい未来を与えてやらねばならない。私は彼女のために、負わなくともよいあらゆる罪科を負おうと思つた。何としても彼女を私の手元に置き、私といつしょに革命の隊伍に帰すのだ。これは私の責任であり、私の良心であった。

丁玲自身が軟禁中の出産について書いたのはこれが最初であり、この「すぐには弁明するすべのない恥辱」<sup>(4)</sup>のために後々まで受けた指弾に対し、次のような嘆きを明らかにしたのも初めてのことである。

のちになつてある人々の目ではこれが「罪状」になり、永遠に私の体に烙印が押され、永遠に許されることなく、永遠に指弾されることになるうとは知るすべもなかつた。時にはこの無辜の娘にまで罪が着せられ、彼女は小さい時から大きくなるまでずっと心に傷を負つて、まるで彼女は他の人より一段低いのが当たり前であり、一部の人々の白眼視と輕蔑を耐え忍ぶのが当たり前であるかのようだつた。「この世はなんと残酷なものだろう（略）」と、私はときどき嘆かないではいられなかつた。

周知のように丁玲は一九三六年秋に南京を脱出して陝北ソビエト区に入り、その後ソ区において九編の短編小説を書いた。三七、八年は散文が中心で、短編も三編書かれたものの、丁玲の個性が十分に發揮された作とは言いがたいのに對し、三九年から四一年には短編の創作が中心となつて六編が書かれ、質的にも丁玲の自我が力強く生きた完成度の高い作が多くなつてゐる。中でも「涙眼模糊中的信念」「我在霞村的時候」「夜」<sup>(5)</sup>は、丁玲自身の感情が主人公に豊かに盛り込まれて共感を呼ぶとともに、その主人公の運命の描写を通して、ソ区社会の問題を浮彫りにしえている。だが、これらの作品への評価は、丁玲自身への政治的評価の変動に伴つて揺れ動き、反右派闘争後の中国では、「転向」の影を指摘し「反党の大毒草」とする論が主流となつた。日本においても、「転向を強いられたという過去」を持つことからくる「抑圧された魂の叫び声」とする論があつた。<sup>(6)</sup>前述のように、私は主要な問題は丁玲自身の転向ではあるまいと思つてきながら、しかし同時に、これらの作品が「抑圧された魂の叫び声」というべき、否定しがたい陰鬱さを持つのはなぜだろうかと考えてきた。それはこれらの作品に、今回の回想で初めて直接的に語られた、軟禁中の出産という弁明しがたい恥辱を負つたことからくる、丁玲自身の苦悩と再生の切望、及び、その恥辱のために受けた指弾に対する嘆きが投

影されているからではないだらうか。

二

丁玲が出産に直接言及したのは今回が最初だが、実は一度だけ小説の中で、不本意な出産を強いられる女の嘆きを扱つたことがある。党的援助を得て、いよいよ南京を脱出する直前の、一九三六年八月に書かれた短編「団聚」がそれである。<sup>(7)</sup> 陸家の長女・鳳大姐は、父親が娘の幸せを考えて選んだ相手と結婚したが、その夫は実はたちのわるい放蕩息子であつた。あるとき実家に戻ってきた娘は母親の前で泣き出すのだが、すでに八か月の身重である。夫は去年から結核を病んでいる。陸家は経済的に困窮しており、母親は出産費用の工面に苦心するものの、結局は夫の家族に頼らざるをえない。慰める言葉もない母親の前で娘はこう言う。

あの人はどうせ自業自得だわ。だけど私は……私は、でもあの人苦しんでいるのを見ているのをただ見ていることもできなかつた。ほかの人は私をばかだと罵るでしょう。私にしてみればあの人死ぬほど憎い。肺病でひどい体になつて耐え切れないほどの苦しみようだつたわ。ところがあの人はとうとう死なずに、生きて私を苦しめるのよ。まったく前世の報いだわ。

夫とした人間が実は憎むべき相手であつたという運命のいたずら。しかしその相手の子供を宿してしまい、不本意であつても産まざるをえない産む性の悲しさ。しかも経済的問題のためにやはりその相手に頼らざるをえない屈辱。一方で、たとえ憎むべき相手であつても、夫婦として生活を共にした人間が病氣で苦しむのを見捨ててはおけない人情。そうした人の情に従うことで逆に自分が人々から罵りを受けることになる皮肉。こうしたことは自分自身の罪として咎められるべきものというより、個人の意志を超えた運命ともいべきものの中での、むしろ自分は犠牲者といえるのではな

いか——これが鳳大姐の「前世の報い」という嘆きの中にある思いであろう。そしてこの思いは、同時に丁玲自身のものでもあつたのではないだろうか。馮達への手厚い看護が丁玲批判時に「転向」の証左とされたこと、及び軟禁中の出産をめぐる丁玲の嘆きについては、前述した通りである。丁玲はまた今回の回想に、生活や病気治療のため、国民党や姚蓬子からお金を受け取っていたことを記している。

しかし党との連絡が取れる前の丁玲の胸中は、今回の回想や鳳大姐の嘆きに比べ、更に葛藤の多いものだつたようすに推測される。一九三六年五月に丁玲が葉聖陶にあてた手紙は、南京脱出の願いを表明したとされるものだが、ここではまだ「私は何も語りたくありません。誰にも弁解したくないのです。ただ時間が速く過ぎ去つて、私が罪人ではないことを歴史が証明してくれればいいのです」と書いている。軟禁中の身の処し方が罪とはいえないはずとの思いと共に、結果として自分が転向の嫌疑を受けてもやむをえない、あるいは節操や思想性を問われてしかるべき生活に甘んじてしまつたことを恥とする気持が、はつきり整理されないままに渦巻き、かつての仲間にさえ心を開ざしがちになつていたのではないか。

とはいゝ、軟禁中の出産という自己の恥辱を含む真相と、「前世の報い」という嘆きを生む心情とを、ありのままに語つて仲間の同情と理解を得たい、それによつて救われたいというのが、丁玲の切なる願いではなかつたろうか。やはり「団聚」の中に、鳳大姐と並ぶ主要人物の陸家の三男が、故郷の母親に次のような手紙を送る場面がある。これは南京脱出を目前にした丁玲のそうした切なる願いと、その切望の実現への期待を示しているように思われる。

……どのように話すべきなのか。あなたに話したいことはいっぱいあるのに、話の糸口が見つからず、(略)ここ的情形は全くあなたの想像もつかぬものです。(略)でも……あなたに話さなければなりません。勇気をふるわなくては、(略)お母さん、許してくれますか。(略)腕を広げて、この満身創痍の旅人を胸に抱く用意をしていてください。

## 三

「信念」が執筆されたのは、ソ区入りから約二年半を経た一九三九年春である。これは、日本軍に捕まつて目の前で孫を慘殺され、自らも中国人との性行為を強いられた陳婆さんが、自己の耻辱を公然と晒すことによって人々を抗日に立上らせるという、悲壯な美しさを持つ物語である。瀕死の状態で日本軍のもとから戻った陳婆さんは、やがて「生きようとする力」によって甦ると、孫娘の強姦の有様や自身の体験を生々しく村中に触れ回る。そんな婆さんの苦痛に息子達は身を震わせて同情し、即座に日本軍への復讐を誓う。一旦は婆さんを気違ひ扱いする嫁達もやがて感情を融和させ、分裂するかに見えた家庭は以前より円満になっていく。婦人会のインテリ女性も日本軍を憎む気持を婆さんと一つにし、婆さんの話の持つ力に感嘆して抗日の動員工作を依頼する。村人も婆さんを好奇の目で見たり節を失つたと指弾することなく、深い同情を寄せて日本軍への憎悪を共有する。そればかりか婆さんの、「生きるためにや鬼子を追つぱらわにやならねえ」という復讐の呼びかけと、「この人たちの生命のため、幸福のために自分を犠牲にしよう」という自己犠牲の決意の表明とに、人々は「嵐の中の潮が岸に打寄せるように」応え、こぞって遊撃隊に参加するのである。そして恥辱をさらけ出した婆さんも、同情を得ること、自分の復讐の念が他人に共有されることで救いを覚え、前途に光明を見るのである。<sup>(9)</sup>

「信念」は抗日の英雄を描けという当時の提唱<sup>(10)</sup>に沿つて書かれた作ではあろうが、しかし主人公の陳婆さんは、敵に辱しめを受けながら生きて帰つた、ともすれば「民族の節操を失つた」<sup>(11)</sup>と指弾されがちな人物である。また、物語の筋は明るい方向へ展開してはいるものの、ラストシーンにも「婆さんは崩壊を見た。光明を見た。涙が視界をぼかしていくにもかかわらず（略）」とあるように、この作品は全編が涙に彩られている。村人の立上がりの描き方が安易に過ぎる

点はこの作品の欠点だが、その欠点がailabilityながらやはり「戦慄的な感動」<sup>(12)</sup>を呼ぶ成功作と成りえているのは、何よりもまず、指弾を受けがちな恥辱を負った婆さんの苦痛と、その恥辱を晒しても再生しようとする切望の描写が、優れた迫真性を持つていてことにはかかっている。丁玲は「信念」において、軟禁中の出産という恥辱を負ったことからくる、自己の苦痛と「前世の報い」という嘆きを、陳婆さんという形象に注ぎ込んだのではなかつただろうか。そしてこの作品世界で、恥辱をもさらけ出して理解と同情を得たい、それにより再生の道を踏み出したいという自己の切望を、見事に実現させてみせたのではないだろうか。「この元来おしゃべりの嫌いな老婆は、自分の物語がもたらす効果に一種の慰めを覚えたのだつた。同情と同感を得ることによつて、彼女の恨みが人の身にも燃え上がつてくるように思え、それによつて恐怖を忘れることができたのであつた。(略) 彼女は自分の恥辱を人に話した」と、丁玲は作中に書いている。

しかし、ソ区入り後の丁玲が自己の苦痛と切望を共有できる主人公を描いたのは、「信念」が最初だつたのではない。

一九三七年八月、丁玲は抗日宣伝のため西北戰地服務團を組織して延安から前線に赴いた。その直前に「重逢」<sup>(13)</sup>という戯曲において、日本軍に捕まり偽装投降して復讐を決意するインテリ女性の苦痛を描いたことがある。だがこの戯曲は、丁玲自身も「それほど納得できる作品ではなかつた」<sup>(14)</sup>と言うように、非合法活動に携わるインテリ女性の特異な体験を描くにとどまり、主人公の運命が幅広い人々の運命を照射するものとなりえず、共感を呼びにくい作に終つてゐる。こうした二作の違いは、「信念」が一年間にわたる前線での服務團活動後に書かれたこと、つまり、丁玲が前線で広く大衆の生活や意識の実態を観察し、抗戦の中で弱者が大きな犠牲を蒙つていると知つたことに係わつてゐるのではないかと、私には思われる。抗戦中の女の犠牲について、丁玲は一九八五年にこう語つてゐる。

日本軍が行つてしまふと村長はドラをたたいて、娘達を責めるな、笑いものにするなど皆に言つた。そうでないと彼女らは首をつったり、井戸に身を投げたりしてしまふ。私はこうした女性達にとても同情した。彼女らは非常に

強い力を持たなくては生きていけない。<sup>(15)</sup>

陳婆さんの苦痛は多くの中国の女の現実の苦痛であり、中国社会では彼女らの多くが死を選ばざるをえなかつた。彼女らの不幸は女という弱者の性ゆえの不幸であり、直接的原因は戦争という運命の中での敵の強姦だが、もう一つの原因には、犠牲になつた者への同情のなさと、封建的な貞節観念に基づく指弾がある——前線で女達の犠牲を直接目にした丁玲はこう考えて、彼女らの不幸に、自らの南京での不幸を重ね合せたのではなかろうか。南京の不幸が決して特異なものではなく、前線で見た女達の不幸と根源的に共通する、中国社会における普遍的な不幸であるという認識に丁玲が達し、共にその不幸から解放されることを強く願つた時に初めて、「信念」の成功が生まれたのではなかろうか。

ところで、前にも述べたように「信念」は全編が涙に彩られており、このことは、丁玲が南京の不幸からすでに解放されたのではないこと、上述の共に解放されたいとの願いがすでに実現したのではないことを、恐らく示していよう。しかしそうであるなら、物語の展開が明るく描かれ、中国社会に対する丁玲の楽観的な見通しをうかがわせているのはなぜだろう。服務団で抗日宣伝に専念していた時期の丁玲は、「關於自衛隊感言」<sup>(16)</sup>という文で、初期自衛隊の人命の被害が大きかつたことを述べたあと、なおも自衛隊を組織して立上がる人々の姿に、「純朴な自衛隊員を見ると常に、抗戦必勝という信念をより固くするのである。彼らの過去を思えば、彼らは實に偉大である」と書いている。これは「信念」で陳婆さんが、自分の呼びかけに応えて立上がる人々の姿に、「しみじみと何が偉大であるかを感じ」ると共通している。「信念」の時期の丁玲は、ゲリラ戦の中で女を始め多くの貧しい人々が犠牲になつてゐる現状に心を痛めながらも、そうした弱者の解放のためにはやはり、不幸の直接的原因である日本軍への抵抗がまず優先されるべきこと、そしてその抗日のためなら多くの平凡な人々が命をかけて立上がりうること、更には、抗日に立上がる中で人々が遅れた意識を打破していることを、認めていたように思われる。

また「信念」執筆の時期は、抗日に伴つて女性解放運動が幅広い高まりを見せ<sup>(17)</sup>、これを指導する延安の運動もまた積極的に進められていた時期であつたようだ。<sup>(18)</sup>一九三九年半ばには、王明を校長に女子大学が開校され、雑誌『中国婦女』も創刊された。<sup>(19)</sup>丁玲が比較的広く女性運動に関わったのもこの頃である。<sup>(20)</sup>「信念」の樂觀はまた、人々の女の犠牲に対する同情や女の解放に対する理解に期待を寄せたこと、女自身も抗日に立ち上がる過程で封建的束縛を打破していると実感したことによるものではなかろうか。自分達の教育によつて封建的だった女達が抗日立上がり、部隊に参加する女が倍増した喜びを、丁玲は前線回りの途次で友人あて手紙にこう記している。

膚施（延安—江上）を出発した時、私達の隊には四十七人の女性がいました。（略）しかし××に着いた時には、すでに倍の余に増えています。しかも多くは髪を長く結い纏足をした者であり、まったく得難いことです。しかしこれは偶然ではなく、私達の半年にわたる宣伝がなかつたら、これらの女性は決して立上がりはしなかつたでしょう。<sup>(21)</sup>

#### 四

「信念」とその約二年後に書かれた「霞村」を並べて読むとき私が最も驚かされるのは、同様に抗日戦の犠牲者である女を主人公としながら、彼女を取巻く状況と彼女の再生の道の描かれ方が、逆転とも言うべき落差を示していることである。日本軍に連れ去られ慰安婦にされた娘・貞貞は陳婆さんと同じく、女という性ゆえの苦痛、運命の中の犠牲者でありながら他人の同情を得にくく節を失つたなどと誤解され指弾される苦痛を、丁玲と共有していると言えよう。しかも、党の要請により日本軍の下でのスペイ活動を続けてきた点で、陳婆さんの自己犠牲の決意をすでに実行してきた人物もある。ところが貞貞の場合は陳婆さんと異なり、人々の同情と理解を得て救われることなく逆に疎外されてしま

まい、人々もまた立上がりはしない。丁玲は一九八〇年に、貞貞のモデルとなつた人物についてこう書いている。

私は心の中で彼女にとても同情した。戦争の中ではたくさん的人が犠牲になつた。彼女も受けずともよい多くの苦難を蒙つた。運命の中の犠牲者なのだ。しかし人々は彼女のことを知らず、彼女を理解しようとはしない。それどころか彼女を軽蔑さえする。<sup>(22)</sup>

性病治療のため村に帰つた貞貞に対し、大半の村人は同情を寄せて敵への復讐の念を抱くどころか、「何でも百人から男と寝て（略）、あの恥知らずのアマッ子、そもそも帰つてこさせるつてのがまちげえでさ」と、事実無根の中傷をして侮蔑・糾弾する。ソ区という新しいはずの社会になお、「暴行されたら死なねばならない」<sup>(23)</sup>と魯迅のいう旧い節烈觀が生きているのである。「自分は強姦されていないからというわけで威張」りさえする、遅れた意識を変革しないままの村人に、「私」は憤りを抱く。やなみに「霞村」では、貞貞に対する人々の態度は専らこの「私」により観察・評価され、貞貞自身は最初のうちは平静で明るくさえある。また、終盤に示される貞貞の異様さを含む態度や選択も、「私」の思いとズレを示しながらも、最後には「私」を納得させうるものとして描かれている。こうした「私」の存在は、読者の貞貞への同情を得やすくし、終盤の貞貞の態度の受け入れられにくさを緩和する役割を果たしており、村人への憤りを始めとする「私」の感情は、丁玲自身のものに近いのではないかと思われる。

一方、村の活動分子の若者達は「あの人こそ英雄だったんですね」と貞貞を称賛するが、「私」はこの若者達にも次のような違和感を感じてしまう。

こうした若い人には前線でもたびたび会つた。彼らに接した時はいつもびっくりし、自分とかけ離れたこうした若者達は実に変りようが速いと感心させられるのだったが、しかしそれも度重なるにつれ、彼らを理解しようとすると熱意が失せてくるのだった。

この若者達への違和感の部分は、やがて最も大きく書換えられていく部分であり、丁玲の問題意識は不鮮明なままである。だが若者達の一見新しい英雄觀はややもすると、「要するに汚れたんです。(略)一度と幸福になれるとは思えません、」という貞貞の傷を思いやることを忘れがちではなかろうか。また、スペイ工作は「重要な仕事ですぐには代りが見つからない」という党の要請が、弱者に対する自己犠牲の強要となる面はなかつただろうか。これらの点への警戒を欠いた今まで貞貞のような英雄になれと提唱することになれば、自己犠牲の要請に応じられない弱者を苦しめ、更には思想面で指弾することにさえ繋りはしないだろうか。<sup>(25)</sup> 「霞村」の頃の丁玲は、南京での不幸の体験から、運命の中での犠牲者となりがちな女の不幸を、旧い女性觀や遅れた意識が増幅していることを批判すると同時に、この英雄觀のよう一見新しい意識の中に潜む問題をも、まだ不明確ながら感じ始めていたのではなかろうかと私は推測する。前後して書かれた「秋收的一天」「夜」「三八節有感」<sup>(26)</sup>等にも、これと共通する問題意識が見られるようと思うからである。

「信念」の半年後に書かれた散文「秋收的一天」は、マルクス・レーニン学院の学生達が、当時提唱された生産運動に応えて取り入れに励む姿を書いたものである。インテリの労働参加をたたえた作品ではあるが、私は次のような描写を見過すわけにはいかない。学院が運動にわき立つ中で、女達は病氣をおして重労働に参加しようとしたり、重労働のできない病身を負い目に感じたりする。運動参加のために、母に会いに来ていた子供も帰さねばならない。畑に行く道では、橋の壊れた川を渡るにも男性にひけを取るまいとする。こうした女達の悲哀を描いたあとで丁玲は、畑仕事の疲れを休める間にも本を広げる仲間の姿に触れて、「誰も落伍者になることなど望みはしない」と記していく。「落伍者になること」とは、新しくなった社会において積極分子となることを要請される中で、それに応えられぬ弱者が、ともすれば思想性や政治性を問われることになってしまふ不幸であろう。この落伍者となる不幸という視点は、「信念」では示されなかつた新たなものであり、貞貞の行為に対する英雄視への違和感に繋るものを感じさせられる。

「霞村」から数か月のちの「夜」では、農村の指導工作に明け暮れる何華明と、彼によれば「三度の飯を作る以外に何の取柄もない」という、中国のどこにでもいそうな女房とが描かれる。戦乱の中で子供を亡くした何華明は一人でも子供が欲しいのだが、十一歳も年上の女房はもう生むこともできない。しかも、夫が忙しい仕事の合間にやつと家に帰れば、「金をもうけない、家のことをかまわない」と、愚痴や恨み言ばかり言って泣く女である。そんな女房を彼は日頃から「落伍している、しつぽをひきずっている」と罵り、この晩も嫌悪を覚えて、独り身になつたほうが楽だとさえ感じる。そんな彼に、婦人会の委員である隣家の若い妻が近づく。彼は心曳かれるが、「俺達二人とも幹部だ、批判されるだ」と欲望を押しのけ、「このおいぼれはどうせ仕様がねえ。まあえわ、飯でも炊かしておけ。離婚騒ぎなんてみつともねえし」と考へるのである。

この作品での丁玲は、新しくなつた社会で依然として旧い世界に取り残され、しかも落伍者とされる不幸を負う女の悲しさを、夫の目を通して、努めて客観的に描き出そうとしているように見える。何の女房を不幸にするのは、一つには「牛ならまだ子を生むってこともあるが、奴はいつたい何だ」と、女を子を生む道具と考えるような封建的女性觀である。だが同時にもう一つの不幸の要因は、そうした女性觀の下で抑圧されてきたことが彼女を落伍者にしているという背景を理解せず、彼女個人の罪であるかに見なして指弾する、夫の側の意識である。しかもこの落伍との指弾は実は、夫の中に依然として残る女性差別を隠蔽し正当化する口実に使われているのだが、夫はそのことに気付きさえしない。

丁玲は何華明をこう描き出しながら、しかし決して、それを彼個人の罪と批判しているのではない。自分の家の畠や家畜が気になりながら帰ることもできないほど多忙な彼は、女房の場合と逆に、先進分子であることを半ば強要される中で、落伍者とならないために自己犠牲を払っている者ではないかとしているようである。欲望を押さえるのにも彼は、落伍者とされないようにとの考慮ばかりを優先させていている。「夜」における丁玲には、弱者を差別する側の不幸にまで

踏み込んだ、こうした視野の広がりがあり、これがこの作品を陰影の濃い一編にしている。

四二年三月作の「三八節」では、丁玲は延安の女性は幸福かと問い合わせ、真に幸福ではない原因として次のような点を指摘している。女性が一方的に家事や育児の負担を担わされながら、「家に帰ったノラ」という烙印を押されがちないこと、落伍を避けるために生命の危険を冒して墮胎するような自己犠牲を払つても、「快適さばかりむさぼり、大きなことばかり好む。何か大した政治工作をやつたことでもあるのか」と批判され、落伍は「自業自得」とされること、離婚の理由が実際には生活の疲れから女性が愛らしさを失つたためであつても、きまつて女性の落伍が口実とされ、女性から離婚を持ち出そものなら不道徳と呪われること、等である。こう指摘した上で丁玲は、女性は時代を越えることはできず、鉄のように鍛えられてもいないとし、大いなる寛容をもつて落伍した女性を見てほしい、ことに指導的地位にある男性は、女性の落伍を社会との繋りで見てほしい、女性の訴えを抹殺しないでほしいと切望している。このやや性急さの感じられる雑文は、党の指導者達の反感を買ひ、丁玲は王实味批判に際し自己批判を迫られた。<sup>(27)</sup>だが彼女は欠点を認めながらも、「長年の苦痛を述べ、切なる願いを盛り込んだ」文章であるとした。

## 五

さて、「信念」で親子の愛情は無条件のものだつたが、「霞村」では両親さえ娘が安価な品物になつたと考え、以前は反対した夏大宝との結婚を迫る。宣伝工作をする阿桂という女性のように、貞貞に深く同情する人もいないわけではない。だが、陳婆さんが同情によつて救われたのに対し、村人の侮蔑にも冷静な貞貞はまた、「女つてなんて因果なんでしょう」と嘆くだけの阿桂の同情で救われることもなく、共に抗日の活動をするのでもない。「私」は貞貞の深い傷にはより大きな愛情が必要と考え、かつて親の反対に負けたことを強く後悔する大宝は、氣概と責任感のある男性で彼女

にふさわしいと見なす。しかし、一旦は大宝の求婚を受けるかに見えた貞貞は、突然「復讐の女神」のように矛先不明の憎惡の念を爆発させ、「誰にも憐れみをかけてもらいたくないし、誰をも憐れまない」「曲りはしない。いこじと言うならないこじでいい。グッと歯をくいしばってあくまで皆と対峙する」との氣勢を示す。そして再び冷静に戻ると、皆がいがみ合うよりめいめいの道を行つたほうがいい、それで人に対するものと思わない、何から何まで人にわかつてもらう必要はないと言い、村と訣別して再生の道を求めるのである。

「信念」の時期の丁玲は、抗日を最優先課題と考え、人々が抗日立つ中で意識を変革することに、期待を寄せていたのではないかとは先に述べた。だが一九四一年の「霞村」の時期に至ると、こうした状況認識に変化が生まれ、樂觀が次第に危機感に變つて、同様に恥辱を負わされた女を主人公とする一つの作品の描き方の、大きな落差となつて表わされたのではないか。こうした状況認識の変化は丁玲一人のものではなく、当時の解放区全体に見られたものようである。毛沢東は一九四〇年二月に、「文化人をはじめとする人々の関心が、従来の抗戦から次第に中國国内の問題へと移り、新中国をどう建設するかが新たな課題となつてきた」と指摘している。文芸界でも四〇年に入る頃から、抗戦の英雄を書けとの呼びかけに代わり、中華民族の新文化を創造せよ、そのためには公式化を克服し眞実を描くことにより、辺区文芸の向上を図れという主張が現われている。<sup>(28)</sup> これは一九四一年半ばに至ると、「贊美をする必要はない。(略) 边区の欠点(それは如何なる新社会においても免れないものである)についても、正に芸術面からの反映と指摘を必要としているのである」という、欠点の自己批判的描写の主張になつていつた。<sup>(29)</sup> こうした中で丁玲も、人々が抗戦に立つ中で本当に遅れた意識を変革し、女を始めとする弱者の解放に繋りえているのかを、改めて問い合わせこととなつたのではなかろうか。三八年七月に前線から戻つて以降は、延安という新中国の雛形というべき所にずっと身を置いていたことで、新しくなつた社会に残る遅れた現象や、新しく見える意識の中に隠れた実は旧い意識と変わらないものに対し、こ

とに問題を感じるようになつていったのではなかろうか。そして作家である自己の役割を、こうした現象や意識と闘うこと求めていったのではないだろうか。四一年作の「大度、寛容与『文芸月報』」や「我們需要雜文」等で、丁玲は次のように述べている。また、同じ年の「在医院中時」という短編でも、ソ区の病院の様々な欠陥と鬪うインテリ女性を描いている。

悪い人・悪い事・悪い傾向に対しても寛容さを求めるのはもとより罪悪である。<sup>(31)</sup>

進歩的なところといえども、(略)中国の数千年來のあらゆる根強い封建的惡習は、簡単には除去されないものである。(略)我々の時代はまだ魯迅の雜文が必要である。<sup>(32)</sup>

こうした変化が文芸界全体のものだとはいゝ、「霞村」の時期の作品が、暗黒暴露の代表作とされるような陰鬱さを持つのは、背景に女性解放問題をめぐる状況の変化があつたためではないかと私は推測している。「信念」の時期の女性運動の盛り上がりは前述したが、のちの整風期に至ると、これまでの運動は大衆と結び付かないプロレタリア的女権主義であったと否定されてしまう。「關於各抗日根據地目前婦女工作方針的決定」<sup>(33)</sup>を始めとする整風期以降の新たな女性運動論は、これまでの運動を、根拠地の経済建設の重要な認識に欠けていた、女性への圧迫に反対するなどのスローガン一式をそらんじるばかりで、妻の肩ばかりをもつて夫を厳しく責め、党に向つて独立性を騒ぎ立て党を恨んだと批判する。そして、もはやスローガンは婚姻の自主や男女平等ではない、今後は女性を生産工作に動員しそれを通して組織していく、女性の解放は女性自身に依拠すべきであると主張するものである。<sup>(34)</sup>批判の詳細や実態は現在まだ十分に明らかでないが、中共内部に女性解放運動をめぐる考え方の分岐と方向の転換があつたことは確かであろう。整風期に新たに定められた女性運動方針が、女性の動員による解放区の生産力の向上や女性の経済力の向上を優先し、男性の警戒を招かないことを重視する傾向があるのに対し、<sup>(35)</sup>「信念」の時期の主張は字面だけで見るかぎり、女が当面していた具体

的問題の解決や、女性差別意識の克服を強調しているようである。<sup>(36)</sup>少なくとも整風期以降の女性運動は、「三八節」の作者は「反革命の同盟者」であるとして、次のように厳しく批判する姿勢を含んでいた。こうした女性運動をめぐる変化の中で、女の解放への丁玲の期待は、次第に危機感へと變つていったのではなかろうか。

「三八有感」の作者は敵が派遣した者ではないが、しかし王寒味と同盟を組み、客観的に敵を助けたのであって、反革命の同盟者になつたのである。(略)もし、今日は宣言を書き、明日はスローガンを書き、明後日は「三八有感」<sup>(37)</sup>を書き、人民に役立つ誠実な工作をしないのなら、それは人民を害するものである。

落差の背景として更に考えられるのは、今回の回想で明らかにされた丁玲自身の恥辱と嘆きに関わるものである。<sup>(38)</sup>一九三八年十月の武漢陥落前に、丁玲は子供達を湖南から延安に呼び寄せた。<sup>(39)</sup>丁玲に二人の子供がいることはこれ以前にも知られていたようだが、自分の身近に彼らを置くことは南京時代についての疑惑を広め、丁玲への「指弾と侮蔑」も強まり、娘への「白眼視と輕蔑」も直接的になつて、嘆きはいつそう深められたのではなかろうか。丁玲は「叛徒」だという口コミ情報が一九四〇年に延安で流れたら、甘露は最近の回想に書いている。<sup>(40)</sup>康生がその噂に関わっており、四〇年の中共の審査は、この中傷に対し丁玲が南京での経過を審査するよう求めて行われたものであることも記している。先に「信念」の時期の丁玲が、南京の不幸を中国の女に普遍的な不幸と認識したのではないかと論じたが、「霞村」の時期にはこうした嫌疑や中傷の広まる中で、再びこれを特異な「罪状」としてつけられることになり、消すことのできない「烙印」と感じさせられることになつたのではなかろうか。反右派鬭争時に林默涵は丁玲を批判して、丁玲には「不當に辛い思いをさせられているという暗い心理」があり、「霞村」にそれがにじんでいるとしている。<sup>(41)</sup>そしてこうした状況の変化の中で、丁玲は再び自己の再生の道を模索し始めたのではなかろうか。「霞村」の頃から上述の鬭う姿勢が強まつたことを考えれば、貞貞の取つた対峙の道は丁玲自身が歩み出そうとしていた道であつたかもしれない。

文学分野では公然と「反革命の同盟者」とする批判はなかつたものの、「霞村」の時期の丁玲の作品の方向に対し「文芸講話」は、人民の暗黒暴露はプチブル個人主義だとした。王実味批判時にも、「三八節」の告発は「少々の、主要ではない欠点を言い立てた」<sup>(42)</sup>ものと批判されたようである。そのためか整風期以降の丁玲の作品においては、弱者を落伍として指弾することに繋る意識の問題をより深く追求してみせること、特に、女を社会的弱者の典型と捉えて問題を更に掘り下げることは、なくなつてしまつたようと思われる。

#### 注

- (1) 丁玲「魍魎世界」(『中国』一九八六年十一、十二期原載、『新文学史料』一九八七年一期転載)。添付資料は転載誌のみ。「前記」に一九八三、四年執筆とある。
- (2) 「文芸界正在進行一場大弁論」(『文芸報』一九五七年二十期)。
- (3) 丁玲「自伝」(『中国現代作家伝略・第四輯』一九八〇年)。袁良駿「丁玲生平年表」(『丁玲研究資料』一九八一年)。
- (4) (1)に同じ。
- (5) 「涙眼模糊中的信念」(『文藝戰線』一九三九年一卷四期。のち「新的信念」と改題。「信念」と略す)、「我在霞村的時候」(『中國文化』一九四一年一卷一期。『再批判』へ一九五八年、作家出版社)による。『再批判』は「一九四六年新知書店版『我在霞村的時候』による」とあり、これは岡崎俊夫訳『霞村にいた時』(一九五一年)のテキストと同一の、四六年二月再版本と思われる。「霞村」と略す)、「夜」(『解放日報』一九四一年六月十、十一日)。他の短編は三七年作「一顆沒有出膛的槍彈」「東村事件」、三八年作「压碎的心」、三九年作「縣長家庭」、四〇年作「入伍」、四一年作「在医院中時」。
- (6) 新島淳良『現代中国の革命認識』(一九六四年)。中国では陸耀東「評『我在霞村的時候』」(『文芸報』一九五七年三八期)、華夫(張光年)「丁玲的“復讐的女神”」(『文芸報』一九五八年三期)など。
- (7) 『文季月刊』一九三六年一卷四期、『意外集』(一九三六年)所収。南京脱出経過は今回の回想と王中忱・尚俠『丁玲生活与落伍の烙印からの再生を求めて

『文学的道路』（一九八一年）によれば、三六年五月党と連絡を取ろうと北京に行つたが取れず南京へ。やがて馮雪峰の手紙を受けとり七月頃上海へ。雪峰の意見で南京に戻り合法的脱出を図るができず、九月秘密裏に脱出。

(8) 「幽居小簡」（『万象』一九四三年三卷六期、『丁玲文集・第五卷』へ一九八四年）にこの旨の注を付して収録。

(9) この作品は岡崎俊夫訳（『霞村にいた時』一九五六年、岩波書店）で広く知られるが、『文芸戦線』原載の版とは一部に違いがあり、誤訳ではないかと思われる。強姦された孫娘の最期について「她説多半是喂了狗（おおかた犬に食わせたのだろうと婆さんは言った）」とあるのが、「だから、婆さんのいうことはほとんどデータメだつたのだ」となり、インテリ女性が婆さんに「怎末我們就跟您一個心思呢（わたしたちはどうしてあなたとこう気持が一つになるのでしょうか）」と言う部分が、「とても、わたくしたち、あなたの気持について行けないわ」となるなど。

(10) 成仿吾「写什麼」（『解放』一九三七年一卷二期）、周揚「從民族解放運動中来看新文学的發展」（『文芸戦線』一九三九年一卷一期）など、共に『延安文芸叢書・第一巻』（一九八四年）所収。

(11) (6) の華夫論文

(12) 岡崎俊夫「訳者あとがき」（『霞村にいた時』一九五一年、四季社）。

(13) 『七月』一九三七年五期、『丁玲戯劇集』（一九八三年）所収。

(14) 「河内一郎」後記（『戰地』一九三八年一卷一期、『一年』一九三九年所収）。

(15) 同年一月、野沢俊敬、藤重典子両氏が丁玲を訪問した時の談話（未公開、両氏から貴重な資料提供をいただいたことに厚く感謝いたします）。

(16) 『一年』所収。

(17) 吳平「抗戦兩年來的華北婦女工作」（『中國婦女』一九三九年一卷四期）、小野和子『中國女性史』（一九七八年）など。

(18) 中共中央委員会「為三八節工作給各級党部的指示」（『中國婦女』一九四〇年一卷九期）。

(19) 一九四一年春、女子大学は延安大学に合併され、雑誌も停刊となる。

(20) 一九四〇年二月、延安婦女界憲政促進会理事となり、報告や宣言署名をする。三月には辺区模範女性となる。(3)の「丁玲生平年表」による。

(21) 「致友人的信」(陳彬蔭『丁玲伝』一九三八年、『丁玲集外文選』一九八三年所収)。

(22) 「談自己的創作」(『新苑』一九八〇年四期、『生活・創作・時代靈魂』一九八一年所収)。

(23) 「我之節烈觀」(『新青年』一九一八年五卷一期、『墳』一九二七年所収)。

(24) 『解放区短編創作選』(一九四六年六月、長城文芸叢書)では「(略)しかしそれも度重なるにつれ、当たり前になるのだった」と書換え、「我在霞村的時候」(一九五〇年、生活・読書・新知三聯書店)では「(略)実に変りようが速いと感心させられるのだった」と書換え。なお後者では「あの人こそ英雄だったんですね」も「あの人は全くすばらしい人だったんですね」と書換え。

(25) 現に反右派闘争では、大衆が尊敬するのは劉胡蘭(敵に捕まり組織を守るため自害したといいう江上)式の英雄であって、貞貞のような、敵に投降し節操を失った者ではないとの批判がなされた。(6)の華夫論文。

(26) 「秋收的一天」(『中国婦女』一九三九年一卷五、六期)、「三八節有感」(『解放日報・文芸』一九四二年三月九日。「三八節」と略す)。

(27) 「文芸界対王實味応有的態度及反省」(『解放日報』一九四二年六月十六日)。「三八節」への批判については丁玲「延安文芸座談会的前前後後」(『新文学史料』一九八一年二期)に詳しい。

(28) 「新民主主義論」(『毛沢東選集・第二卷』一九五一年)。

(29) 洛甫(張聞天)「抗戦以来中華民族的新文化運動与今後任務」(『解放』一九四〇年一〇三期)、艾思奇「抗戦中的陝甘寧辺区文化運動」(『中国文化』一九四〇年一卷二期)など、共に『延安文芸叢書・第一巻』所収。

(30) 『解放日報』社説「歓迎科学芸術人材」(一九四一年六月十日)、「努力開展文芸運動」(同八月三日)など、共に同右書所収。

(31) 「大度、寛容与『文芸月報』」(『文芸月報』一九四一年一期、『丁玲文集・第四巻』一九八四年所収)。

(32) 「我們需要雜文」(『解放日報・文芸』一九四一年十月二十三日)。

落伍の烙印からの再生を求めて

(33) 『中国解放区婦女運動文献』(一九四九年、新華書店) 所収。(17)の『中国女性史』によれば毛沢東の執筆と言われる。『中國解放区婦女運動文献』ことに「關於目前解放区農村婦女工作的決定」(一九四八年)、『中国婦女運動的重要文献』(一九五三年、人民出版社) ことに「中国婦女運動當前任務的決定」(一九四九年)によれば、この決定は「のちの女性運動の基本方針となつた。

(34) 蔡暢「迎接婦女工作的新方向」(一九四三年)、劉少奇「總結婦女工作幾個基本認識」(一九四五)、朱德「發動廣大婦女群衆參加生產建設」(一九四八年)など、共に『中国解放区婦女運動文献』所収。

(35) 例えは鄧穎超「土地改革与婦女工作的新任務」(一九四七年、『中国解放区婦女運動文献所収』)は、この新方向へ進む中で女性運動に対する放任主義が生まれ、女性蔑視思想の除去や女性の利益擁護という面がながりにされたと批判している。

(36) 王明「論婦女解放問題」(『中国婦女』一九三九年創刊号)。

(37) (34)の劉少奇の論文。

(38) 丁玲「我母親的生平」(『芙蓉』一九八〇年三期、『母親』一九八〇年所収)。

(39) Insun (朱正明)「丁玲在陝北」(『女戰士丁玲』一九三八年)、任天馬『活躍的膚施』(一九三八年)、蕭軍『從臨汾到延安』(一九八三年)など。

(40) 「毛主席和丁玲的二三事」(『新文學史料』一九八六年四期)。

(41) (2)に同じ。

(42) (27)に同じ。